

一億総活躍社会を目指して ～障がい者の働き方改革と地域との連携～ 津久井やまゆり園の事件を忘れない

神奈川県鎌倉市岡本 2-13-18

富士ソフト企画株式会社

部長 遠田 千穂

1 はじめに

津久井やまゆり園の事件は世間に大きな衝撃を与えた。障がい当事者だからこそ生きる価値がある。障がい者は健常者が体験できない世界を知っている。「障がい力」がある。職場で地域で学校で如何に障がい力を発揮し、共に生きるか？アニマルセラピーを導入したり、フラワーセンターの花摘みをボランティアで実施することで、命をいつくしむ心を醸成する。公的職業訓練を受諾し、障がい者が講師を努めることで地域の連携をはかる。高齢者の方々との触れ合いも大切に、又、高齢者の雇用にも力を入れる。働く意欲と体力がある限り、定年はない。防災訓練にも力を入れる。社員の9割が障がい者で構成される特例子会社の挑戦を記す。

2 事例や取組の紹介

・「女性として働きたい。」社員から受けた相談である。自らの性に違和感を感じながら生きてきたが、我慢の限界であり、名前の変更、服装、使用設備の変更を申し出たという記である。

一億総活躍社会の目的は、誰もが生き活きと働ける世の中を願っているものであり、生き辛さを感じながら出勤することは合理的配慮とはならない。当事者の希望と背景にあるものをよく見極めた上、女性として働く許可を出した。「これで堂々と出勤できます」と、勤怠の改善にもつながった。

仕事をする上では健常者が障がい者に指示を出すのではなく、この仕事を、如何に効率よく行えば採算が取れるのか自分達で考え、自分達でマニュアルを作ることがやる気につながる。ああしなさい、こうしなさいでは、自分でものを考えない社員になってしまう。自ら学び、自ら実行する機会をどれだけ作れるかが企業の裁量にかかってくるのだと考える。

・理性を鍛えて本能を抑えよ

会社員は「無意識のうちに朝起きて顔を洗い、鞆を片手に電車に乗り、会社の椅子に座っている。出勤が習慣化しているのだ。この習慣作りこそが、社会人の基礎となる。

いつまでも布団に入っていたいという人間の本能を優先させるのではなく、そこで起きて会社に行くには、どう生活すべきなのかそれを自ら考え、実行することが社会人の務めである。

・「他人をコントロールするのではなく、自分をコントロールしよう。」孤独力を鍛える。

「自律」の一言に尽きる。9:00～17:30は、会社の時間だが、17:30～9:00までは自分の時間なのだ。それをアルコールや、暴飲暴食で潰すのか、スポーツや趣味に打ち込むかどちらが、「自律」につながるだろうか？休日の過ごし方も重要である。趣味や体調・障害状況等を発表し合う1分間スピーチも、働き方改革では有益な時間となる。コミュニケーション力は、鍛えれば身に付く。孤独力は、年月をかける習慣から鍛えられることも多い。

・「障害力を活かす」

障がいを負ったことを後悔するのではなく、むしろその経験を強みにして親会社のうつ病を発症した社員のリワークの受け入れも行っている。2週間、午前中は自分のスキルを障がい者に教え、午後は自分の人生をPPTを作成して語る。障がい者はうつ病を発症した健常者の心の痛みや薬の副作用がよくわかる。病気に関しては先輩であり、アドバイスも適格に行う。その後産業医面接を経て復職、へと進む。

今の仕事に固執して適応障がいを発症している可能性もあり、中には精神保健福祉士の資格を取得して病院へ転職したグループ会社の社員もいる。現在の自分を見つめ直すよききっかけになっていることは間違いない。

・「新卒社員の力を活かす」

現在発達障がいの新卒・第二新卒の新入社員も増えている。優秀なプログラミングやPCスキル、語学能力を活かすべく仕事の面と点を掘り深める。障がい者、女性、外国人の雇用促進は急がれることであり、英検やTOEIC、PC検定、メンタルヘルス検定にチャレンジする社員も増えてい

る。特別支援学校や、高校、大学教員に於いても企業がどのようなスキルを求めているのかを把握し即戦力としても、活躍できる。障がい当事者を育成する必要もある。

・「生き物を愛でる・アニマルセラピーの導入」

動物でも、植物でも、命を大切にすることは情操教育にもつながる。情操教育は子供だけではなく生活にわたっても必要な教育である。日頃から大切にしている心の訓練が大切である。

SNS やラインの普及もあり、極めてスピーディーな衝動的な、短い言動が増えている現代、1つの命にじっくり向き合い、温もりを感じることで、心の鎮けさを取り戻し、集中力も高まり企業の業績UPにつながる。

・フラワーセンターでのボランティア、大船のフラワーセンターで花がら摘み等のボランティアを実施することにより、地域との連携を図る。

「特別支援学校でビジネスマナーやPC操作を教える」横浜市教育委員会の依頼で、若葉台特別支援学校や、二ツ橋高等特別支援学校で、障がい当事者の社員達がビジネスマナーやPC操作を高校生たちに教える。又、茅ヶ崎養護学校の学校評議員会として、卒業後どうやって生きていくか、災害時はどう行動するか、地域の方々とは日頃どう接するか、知恵を出し合う学校評議員会にも毎回出席している。

・「地域医療センターや福祉施設で WRAP (元気回復プロジェクト) を地域の方々に教える」

障がいを持つ社員が講師となり、地域で WRAP の講義を展開する。1人でも地域の障がい者や高齢者が笑顔になれるように、障がい者が障がい力を活かしてファシリテーターを務める。「公的職業訓練を受諾し、地域の方々や地域の病院のデイケアの方々に PC やオフィスマナーを教える。」ゆりかごから墓場まで地域に密着した企業と福祉の観点から、1人でも多くの方が地域社会で社会復帰を果たし、活躍できるように障がい当事者が講師を務める。今まで 42 回受諾し、卒業生は 467 名。内 7 割は就労している。

3 考察

規則正しい地域参加、生活を営むことにより、障がい者が高齢福祉、障がい福祉、児童福祉の未来を拓くことは可能である。社長は神奈川障がい者・高齢者自立支援協議会の会長であり、福祉にも積極的に携わる。

4 終わりに

障がい者の力を福祉や高齢化社会に活かすと優れた力を発揮する。東日本の震災の時には、鎌倉市立玉縄小学校に非難した。最初は泣きじゃくっていた障がい者の社員達も近所の方々に毛布や、食料を配ったり、ろうそくを灯したり、地域の方々の為に動いていると落ち着きと安定を取り戻した。災害時、障がい者健常者を問わない、又子供、お年寄り、老若男女の助け合いも、福祉の未来につながり、実践している。



誰もが健康で文化的な地域・社会生活を送る為には、規則正しい生活が送れる環境と就労がとても重要なポイントとなる。これから就労する生徒や、定年退職した方々との交流も欠かせない。そこに外国人や、障がい者も加わり、地域一帯となってお互いの幸せを自分達で探求していくことが健全な地域社会の礎となる。法律だから、行政に言われたからではなく、「まず自分達が社会の為に何ができるのかを考えよう」という理念を大切に今日も福祉の未来を拓く様々な挑戦や活動を続ける。好きで障がい者になるのではなく、好きで高齢になるのではない。万人がいつかは自分に訪れることだと覚悟して、そうなった時にどう生きるかを考えることが大切だと考える。障がいや病気や、加齢は他人事ではない。一度きりの人生をどう生きるかが福祉の未来に繋がる。自殺者を出さない世の中を目指し、人の為に生きることは、自分の命を活かす事に他ならない。